

「日本兵の罪」見せた覚悟

語り部 父の戦争

2

慰安婦問題で活動 田中 信幸さん

るのが自分の役割だと思
い、腹をきめた。

□ □

田中さんが電気工事業を営む傍ら、歴史教科書や従軍慰安婦などの問題に取り組みようになり、かれこれ長い。きっかけは父から聞いた戦争体験だ。

幼い頃、父から戦争の話
を聞くのが好きだった。

「フィリピンで食べたバナナやパイアは甘くてうまかったねえ」。軍艦や戦闘機の絵をノートに描き、好んで軍歌を歌った。活躍したと自慢げに話す父をカッコいいと思っていた。

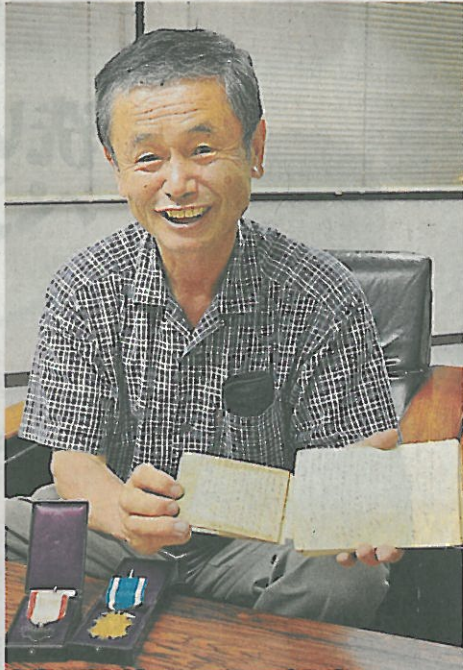
戦争に疑問を抱くようになったのは高校3年の時。元兵士の証言や戦時下の中国の様子などを本で読み、人間がごみのように扱われ、死んでいく現実を知った。「あれは日本の侵略戦争だったのではないか」

大学では学生運動にのめり込んだ。東京で沖縄返還協定に反対するデモに参加し、逮捕された。勾留中、思い切って手紙で父に疑問をぶつけた。

「私は真実を知りたい」
保釈されて熊本に戻り、父に会うたびに戦争の話を持ちかけた。「南京では虐

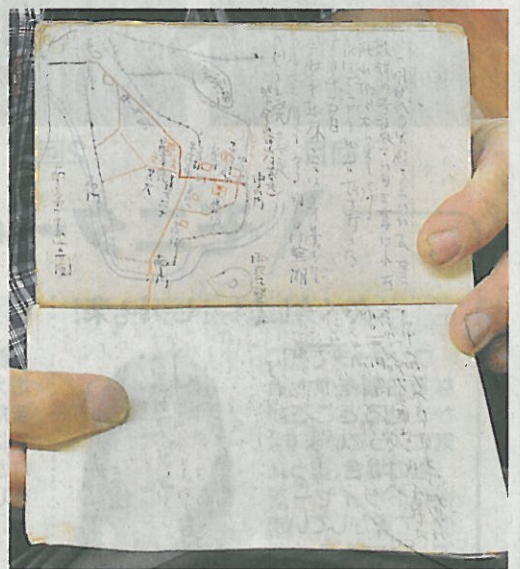


若い時の田中さんの父



父の日記を手にする田中
信幸さん＝熊本市中央区

従軍日記の告白次代へ



田中さんの父が従軍中に書いた日記。訪れた中国・南京の地図が描かれている

殺に加わったのか」「慰安所にも行ったのだろう」。

本で知った「日本兵の罪」をぶつけては責め立てた。

「もうやめてくれ……」
父は心を閉ざすようになった。

こんな言い方じゃいけないと、父の体験を受け入れるように、時間をかけて、徐々に聞くようにした。

ある日、意外な話が出てきた。かつて戦争を肯定的に話していた父は、てっきり保守的な思想だと思

っていたが、若い時はプロレタリア文学に傾倒し、政治改革を訴えるビラを配り、危険思想と疑われて憲兵に尋問を受けていた。

時代は違うが考え方は自分と同じ方向だったんだと思

分と対話を10年以上続けたらどうか。父は突然、日記と手紙をよこした。日記はポケットに入るような小さなノートに2冊、手紙は300通以上。家族の誰一人、その存在を知らなかった。

日記は中国戦線で従軍中に書いたためたもので、手紙は別の戦地にいる戦友や、日本の親族らから安否をたずねるものだった。

驚いたのは日記の内容だ。昭和13年2月21日 今日
は楽しい外出日だ。先ず朝鮮征伐に行く。

最後に、恋人八重ちゃんそっくりの懐かしい竹の七号智恵子さんを尋ねた

3月13日 三人して慰安所に行った。日本・支那・朝鮮を征伐して帰る

「征伐」とは慰安婦を利用すること、国名は慰安婦の出身地、「智恵子さん」は慰安婦の名前だという。父が説明してくれた。

初めて人を斬り殺し、ほぼ毎日書いていた日記が1週間途絶えるほど動揺したとも。「戦争なんて二度とするもんじゃない」

父は、田中さんが元慰安婦へのカンパを募ったり、裁判を支援したりしていたことも知っているはずだった。本来なら、墓場まで持っていくつもりで話してくれたのは、本当の戦争の姿を伝えようとした父の覚悟を感じた。

それ以来、時間を見つけては日記の内容を父と2人でひもといた。その作業は父が亡くなるまで続いた。「戦場で何があったかを残そうとした日記は、父が自分に託したバトンなんです」

自分が次へとつなげるために、最後まで読み解くつもりだ。